

広島俳句倶楽部

令和五年十月作品集

「夾竹桃」

亜矢

八月下旬、私は、モーツァルトの歌劇「フィガロの結婚」を鑑賞しました。三時間余りの幸せな時間でした。

広島に音楽の専用ホールができ、そこでオペラが上演されることが私の願いです。

抽斗のチケット探す残暑かな

秋の風リネンのシャツを通りたる

観劇へ大通り行き夾竹桃

チェンバロの譜面煌々秋の音

秋めくと指揮の手の甲波打てり

八月やブラボーの声飛び交ひて

幕間に調律をする秋の昼

紅薔薇や歌手のかつらの重たさう

文月の幕ゆつくりと下りにけり

オペラ果つ秋の噴水高々と

《作品鑑賞》

溝田ちどり

クラシックに疎い私は、亜矢さんの音楽を題材とした俳句をいつも楽しく拝読している。

今回は、「フィガロの結婚」の鑑賞の俳句。抽斗という身近な世界から夾竹桃の咲く大通りを経て劇場の世界へと引き込まれていく。

チェンバロの譜面煌々秋の音

八月やブラボーの声飛び交ひて

私の好きなチェンバロに秋の気配を感じる。指揮が激しくなり歌声の掛け合いが最高潮に達する場面で、八月の季語はぴったり。

紅薔薇や歌手のかつらの重たさう

文月の幕ゆつくりと下りにけり

歌手の重そうなかつらと紅薔薇の取り合わせがなんとも絶妙。終演の幕引きとともに文月もすっかり終わる。

オペラ果つ秋の噴水高々と

帰路に就く大通りの秋の噴水と作者の胸の高なりが聞こえてくる。この作品の鑑賞を通して晴々しい気持ちで秋を迎えられそうだ。

佐保光俊

備中も備前備後も盆の月

小望月いつもの道を帰りをり

村上正人

門締めて見上げる空に盆の月

臥待の天心にある静寂かな

高尾ひとみ

望月をときをり仰ぎ人走る

望の月吾は女と思ひけり

あざみ

上げ潮の川まんまんと夕月夜

名月の光あまねき窓辺かな

亜矢

真直な裏道歩き小望月

おしやべりなインコの眠る月夜かな

綾乃

名月やりノリウムの床散策す

厨にて水汲む夜半や今日の月

井藤希

城山の鴉鳴き止み月今宵

ひんがしの大満月と向き合へり

栄吉

満月や見知らぬ人の肩がふれ

レコードの溝まで見えて秋の月

大畑恵

瀬戸の海ブルームーンの輝けり

満月や昔話を祖母に聞き

暁子

名月やしばし廊下に佇みて

雨あとの庭草匂ふ十三夜

すみれ

名月が出たと呼ぶ声箸を置く

望月を見る顔の並びをり

知佳子

街はまだ車渋滞今日の月

声出して見上げてをりぬ今日の月

ちどり

盆の月娘とふたり散歩する

町内で演芸会や芋名月

辻純江

名月や夫婦互いに秘密あり

今送る暮しは余生月祀る

雲雀

亡き兄と見上げたときも望の月

ごめんねの言葉の出そう満月の夜

ふじ女

ジャケットがストーンと落ちて月客
最後には宇宙の話月の友

松田裕子

歳かさね二人で歩く月の道
月あかり生後三日の子の顔に

森口良樹

乳飲み子と車窓に見たり望の月
親月の池に漕ぎ出で大覚寺

大原良子

名月を見上ぐる子らの黒き背ナ

金川昭子

ふる里の友と語りし盆の月

上島康子

盆の月スマホ構ふる帰り道

河原静子

盆の月大きくゆつくり昇りゆく

紀英子

月天に山影くつきり映し出す

熊谷ゆり子

押し寄せる雲の切れ間に盆の月

桑門わかこ

坂道を浜に下りて盆の月

須美れい

名月や天に綻びなかりけり

高嶋彌代

はらからの三人で見る盆の月

高梨英子

仮縫のすんなり終り今日の月

民

山の端の明るさ増して盆の月

友岡崇山子

今日の月夫は芒を活けてをり

樵子

川の字に子らの眠りて望の月

みさ子

盆の月露天の風呂の八十路会

美耶

海の月瀬戸の島々照らしをり

やす保

盆の月祖父の墓盤は定位置に

山崎桂子

薄雲の向うに見ゆる盆の月

山野ウタ

歓談の灯りを消して月見かな

このたびは秋蟬を聞く播磨かな

青柿や駅家の跡に立つてみる

干し物をする人見ゆる稲の秋

紅芙蓉寄れば鳥声遠ざかる

露草や大路を上り下りして

この川を渡れば吉備や秋日濃く

虫鳴くや松葉はよべの雨とどめ

秋暁の星々に山明らけし

秋の草刈られて風がよく通る

こほろぎは川の流れへ鳴くものか

上の方稲刈り始む棚田かな

秋暁や明き金星昇りくる

休みつつ散歩をしたり秋日影

指で輪をつくりて覗く今日の月

立待は明るき星を連れてをり

門の内紫式部刈り込めり

過りたる螳螂を待つ車椅子

退院に向けての準備杜鵑草

来週は母帰りをむ実紫

退院の庭を綿虫漂へり

夕さりて秋の初風橋に吹く

つくつくし鳴きやむ頃や夕まぐれ

カーテンを洗うて干して秋の風

こぼれしをいつも掃かれて萩の花

朝顔にやうやう峽の日の届く

秋の風朝の窓に吹きにけり

朝の風受けて歩きし白露かな

秋の雨しばらく頬を濡らしけり

水引の花にかすかな風の吹く

椽の実のひとつ転がる今朝の道

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

虫の音のまろび寝誘ふ夕べかな

湯上りに庭に出づれば虫時雨

佇みてしばらく眺め鰯雲

笑ひ合ふ互のズボン草虱

久々に友寄り合うて芋煮会

月光に伏して読むなり師の句集

窓の月我が脈拍の確かなり

二十日月神に漁火はつほと

再会の友と握手や菊日和

我が肩にふれて木の葉の降りしきる

あざみ

姉にもらふ葡萄両手に重きかな

一粒の葡萄切り分け母の皿

黒葡萄卓の真中に置かれたる

秋の夜の短き友の電話かな

ヴィオロンの赤とんぼ聴く九月かな

球児の声飛び交つてゐる瀬祭忌

秋の暮ひとり素振りをする子かな

十六夜や細かき雨の空見上げ

立待の一番星を見上げたる

更待や横たふる膝壁に付き

亜矢

申し分なき桃そつと爪立つる

習ひごと終へおしろいの道歩く

おさらひの音読聞こゆ菊日和

セザンヌのやうに秋果を盛りにけり

四方へと蕊伸びやかに曼珠沙華

安土山背にし虫の音深まりぬ

子の駆ける花野となりて古戦場

家々に虫の音が家近づきぬ

待宵や心ゆくまで夜想曲

うたた寝の吾子の机に夜食置く

綾乃

山頂の大岩に聞く秋の蟬

昼過ぎの御堂に聞けるつくつくし

閑け放つ御堂を抜けて秋の風

家までの道のあちこち虫の声

翁位む庭の真中の鶏頭花

静けさの増したる午後の花木僅

秋の蝶千畳閣に近づきぬ

満月の波止場に釣りの親子かな

船笛を近くにしたる月夜かな

月明や港のクレーン遠く見て

花芙蓉塵一つなき一軒家

崖下に賽の河原や水の秋

幼子は満月を見てよいいどん

人の来ぬ場所を見つけて良夜かな

村ごとに幟の違ふ秋祭

新しき家も声掛け秋祭

バス止める法被の列や秋祭

漁釣にラーメン売りの車来る

コンビニの袋違へど漁を釣る

秋澄むや双眼鏡で鳥捉へ

坂道を上り着きたるダリア園

朝の道吾へと揺れて萩の花

藤袴植ゑて渡りの蝶を待つ

杜鵑草摘んで仏に供へけり

彼岸花いつもの場所に咲いてをり

雲一つなき空にあり望の月

玄関の金木犀に気づく朝

銀杏を拾うて庭に植ゑにけり

古刹への参道に生え大茸

古希を過ぎ第九を歌ふ秋日和

井藤希

栄吉

大畑恵

銀杏のにはかな風に落ちにけり

往還は峠を下り稲の秋

故郷やいづこも菊の花咲いて

花園の風アサギマダラのやつと来る

脇道は小川に沿うて野菊晴

弥山嶺を見てゐる釣瓶落しかな

大鴉桜紅葉を散らしけり

太鼓橋映して園の水澄めり

色葉散り橋のたもとの船着場

長き夜の仕舞湯の音してをりぬ

暁子

菊の香の柩に皆で蓋をせり

穂芒や野辺の送りに我も行く

膝の上萩のこぼるる車椅子

芒の絮取つては飛ばす量かな

閑け放ち秋風通る部屋に居り

名月の見ゆる窓辺に椅子を置く

満月が屋根に隠るるまで見詰む

高速の窓に見えたる櫓紅葉

紫蘇の実をこそぎ母との二人の夜

畑の屑燃やす煙や秋深し

すみれ

かたはらを風過ぎてゆく秋の朝

秋草を通り抜けたる風を受く

足元に石叩来る水辺かな

二つ咲き一つ萎みて花芙蓉

小鳥来る道を静かに歩きけり

木犀の枝を手折りてくるる人

団栗を踏んでいつもの上り坂

水澄めりところどころに日の差して

赤い実も青い実も生り秋深し

肩に背に木の葉時雨の降りにけり

知佳子

母が家の裏の畑に花茗荷

母の部屋の花瓶に活けて孔雀草

稲を刈る幼子も乗るコンバイン

刈り取りし稲束を子が運びけり

紫苑咲き義母の静かに逝きたまふ

小望月久々に母見舞ひけり

演芸会済みて芒を貰ひたり

どこからか木犀匂ふ物を干し

母の部屋の壺に差したる金木犀

母のため山から野菊取り帰る

ちどり

四十雀聞いておむすび頬張りぬ

八ヶ岳に黒雲傷くや蕎麦の花

吾亦紅口笛吹いて歩きけり

旅終えて一つ付きたる草虱

学校の集団下校曼珠沙華

式部の実おしやべり続く昼下り

醉芙蓉明日咲く花の揃いたり

秋風に乗馬の列の進みおり

鰯雲影絵のような讃岐富士

満月も映して野球中継す

辻純江

朝晩ざし青唐辛子手に溢る

父母と久に語りて墓参り

只ここにつんと立ちたる曼珠沙華

草叢に入りて見てゐる吾亦紅

虫の音や庭の闇にて立ち止まり

戸を閉めて夜長の仕事にとりかかる

二人して眺むるがよき望の月

今日の月遠く居る子も見えてくるか

伏す友にこの満月を贈りたし

稲粟を踏む音のする山の中

雲雀

笛吹きが子供連れてく秋祭

精算機精算終わる秋の暮

秋の空列車は海と平行に

無花果の切り口白く膨らむ夜

右側が黄色い同士林檣二個

かんざしの群のごと立つ城の菊

運動会校舎の裏にこだまする

落花生お城の濠に城映る

いつからか畑に冬瓜とボール

秋の山空砲響く獣道

ふじ女

同病の人よりもらふ桃ひとつ

虫の鳴く方へ方へと歩きけり

虫の音の音階レレレフーフーフーフ

虫の声聞きつつベンを走らせる

コスモスの丘を巡回バスめぐる

助産師と赤子と見たる今日の月

なりたての母親たちの居る良夜

名月を電話の君と見てをりぬ

自販機にコインの落つる音秋夜

蒂目の上に金木犀こぼる

松田裕子

鶴帰る藁ぶき屋根の村を越え

蟻が蟻踏み越え行けり蟻の道

るのこづち河原にボール探しをり

猫じやらし一両電車の風に揺れ

秋日影ベンチに杖を忘れをり

水彩画並ぶ駅舎に風さやか

母を訪ふ帰路を照らして秋夕焼

後縁の苗の空に鴈鳴けり

追伸に会ひたしとあり秋灯

今年また公孫樹黄葉に会ひに行く

森口良樹

病景を押しつつ鯉の寄り来たる

夕日受け穂先の光る芒かな

裏庭の紫苑に吹いて峡の風

秋の夜やといひ今日も長電話

川岸のコスモス過る鷺の影

弟の落として戻る田水かな

我が影を踏みゆく釣瓶落しかな

園庭の真中に木の実降りにけり

皓々とビルの谷間を今日の月

山野ウタ

お揃ひの甚平を着て肩車

終活のアルバムを見る夜長かな

秋晴の静水に浮く五橋かな

秋場所の呼び出しの声澄みわたる

満月の丸く見えねど是非もなし

十三夜子に支へられ仰ぎけり

須美れい

故郷に待つ人のあり盆の月

木犀の勝手口より香りくる

渡り鳥一斉に来る朝の川

バスを待つ間に月の昇りけり

月の道ライブ帰りの人続き

欄干にもたれ見上ぐる今日の月

撫子

山肌に傾ぐ芒の限りなし

鈴生りの石榴空家の裏庭に

庭に降る木の実に野鳩二羽三羽

名月や薄き雲間に見え隠れ

寝そびれて窓辺に椅子を寄す月夜

大原良子

作り手の写真と届くマスカット

鱗雲一日に二合の米を研ぎ

服薬の少なくなりて秋の昼

空高し杖突く音の小気味良き

ベランダから声を掛け合ふ月見かな

高梨英子

夕暮に鳴き声高く子棕鳥

酒蔵の奥にコスモス揺れてをり

バンクした自転車を押す夕月夜

カフェオレを飲み干して見る今日の月

上島康子

間引菜を佃煮にする暮しかな

鬼灯の紅深くして倒れたり

秋茄子をやつと片付け夕暮るる

実石榴の紅美しく皿に盛る

紀英子

爽やかや故郷で弾く駆ピアノ

皓々と伊呂波楓の上に月

竜胆の咲く丘のうえ馬が居る

日南の各駅ごとに帰り花

高嶋絹代

野分来て中洲の草の波立てる

勝手口開けば今朝の花芙蓉

幾たびも雲間の月を見に行けり

ベランダの端で満月仰ぎ見る

みさ子

高尾山駆け登る人空高し

秋晴の巨石見上げて高尾山

秋晴や綱で登れる高尾山

秋晴や子の声響く高尾山

山崎桂子

秋の雲鱗に筋に変はりゆく

木犀の花散る道に風が吹く

店先に蜜柑や柿が並びたる

金川昭子

八重咲の百日草の種を採る

秋祭り笛や太鼓が鳴り響き

奥入瀬の紅葉描く画家あちこちに

河原静子

月落ちて始発列車の動き出す

ゆりの木の天辺に来て鵲鳴けり

晴天も降つてもよろし初紅景

熊谷ゆり子

木犀のひと日散れるを掃きにけり

木犀の香りに街の暮れゆけり

皓々と照らされてゐる月夜かな

桑門わかこ

瀬戸の海航路の月の碎けたる

漩柿を見るたびに買ひ剥いてをり

もうすまいもう剥くまいと柿を剥く

民

樂しげに貧乏自慢金木犀

今朝の風すこし冷たく柿は赤

望月の島影に寄す波の音

友岡崇山子

空高し鳥の大群過ぎ去りぬ

廢屋の庭先に咲く菜鶏頭

はの白く海面照らす後の月

美耶

金網に苦瓜ぶらりぶらりかな

まつすぐな道に止まりて望の月

久々に巡る山道草紅葉

やす保

令和五年九月度作品集より

ふじ女 私の選んだ十句

夏蝶の花吸ひに来る大路かな	佐保光俊
川底に大き野鯉や秋の水	村上正人
百日紅かくも厳しき日を受けて	高尾ひとみ
月涼し小さきダイヤのネックレス	亜矢
大川の尽きぬ流れや墓洗ふ	井藤希
栗拾ひ道はいつしか行き止まり	暁子
舟を漕ぐ人に声かけ秋高し	知佳子
真夜中に一匹の虫鳴いてをり	ちどり
今日もまたどきと散れる牡丹かな	雲雀
海猫のみな横顔で浮いてをり	松田裕子

松田裕子 私の選んだ十句

大路へと開け放たれて夏座敷	佐保光俊
夏の月真夜に覚めれば満ちてをり	高尾ひとみ
一本の紐に朝顔巻き付いて	亜矢
盆帰省良き嫁などと由無し言	綾乃
彦星に勝れる思ひありし日よ	井藤希
真夜中に一匹の虫鳴いてをり	ちどり
木曾谷の旅の途中の残暑かな	辻純江
とろろ汁と言うて夫は膳に着き	雲雀
山里にかなかな鳴いて父帰る	美耶
名を知らぬ草花咲いて秋となる	須美れい